

## 神様の真の御心

ヨシュア記6章1～21節  
2021年6月13日  
松田 基子 師

天地万物の創造主であられる神様は、人間の命の与え主として、人間を愛されました。

それも、特に、虐げられている人々に目を注ぎ、愛されました。その何よりの証明は、エジプトの奴隷となっていたイスラエルに目を留め、彼らの先祖アブラハムとの約束である、

「あなたの子孫を祝福する。」

との契約を忘れず、彼らをエジプトから救出し、ご自身の民となさったことです。

神様は、イスラエル人が、ご自身の御心を悟ることが出来るように、律法を与えて、訓練されました。ところで、

- ◎ 荒れ野の40年の訓練を受けた、イスラエルに与えられた**使命は何であった**でしょうか。
- ◎ 神様は**何故わざわざ、カナンの地まで**彼らを導いて来られたのでしょうか。

神の民に選ばれた**イスラエルの使命は、**

『自分の願望、欲望に答えてくれる偶像の神々しか知らない世界に、ヤハウエと呼ばれる、あるものをあらしめる、**創造主なる神様が、真の神としておられる事**を知らしめ、その神様は**どういうお方であるか**を知らせる事』

でした。

イスラエルの人々は、そのために、神様の御言葉に聴き従う訓練を受けたのです。人間は創造主なる神様の言葉に聴き従ってこそ、本来の人間らしさを発揮し、皆が幸せになれるのです。神様は、イスラエルの民を、ご自身の御言葉に聴き従うことを訓練するために、神様の言葉以外に、なにも頼る事の出来ない、荒れ野の生活に導き、40年の間、訓練されました。

一方、イスラエルがこれから入って行く、約束のカナンの土地は、イスラエルの人々よりも人間の力を誇る文化や戦力を持っていましたが、人々は、我欲を実現してくれる偶像の神々を拝んで、弱い者を踏み台にして、私利私欲に走り、罪と悪が蔓延していました。神様はそれ故に、**その地を一掃して、イスラエルの民に依って神様に聞き従う国を建てるために**彼らを、ヨルダン川の東側まで導いて来られたのでした。

指導者ヨシュアは、2人の若者をヨルダン川の西側、エリコの町に斥候(せっこう)として、送り込みました。2人はラハブにかくまわれて、無事に任務を果たして、ヨシュアの許(もと)に帰ってきますと、

2章24節で、

「主は、あの土地をことごとく、我々の手に渡されました。土地の住民は皆、我々のことでおじけづいています。」

と報告しました。愈々(いよいよ)全イスラエルに、ヨルダン川を渡らせる時がきました。ヨシュアは40年前、葦の海を分けてイスラエルを助けられた神様の御業が鮮やかに甦って来ました。神様は再び御業を表して、神様ご自身が創造主であられる事を証明なさるのでした。

3章15節を見ますと、時は、

「春の刈り入れ時期で、ヨルダン川の水は**堤を越えんばかりに満ちていました。**」

イスラエル旅行に行った時に、エリコの遺跡を見学しました。ガイドの牧師の説明では、春の刈り入れ時のヨルダン川は、ヘルモン山の雪解け水で、流れ降る水量は、最も多く、堤を越える程に増水するのだそうです。そのためにエリコの人々は、

『この時期のヨルダン川を、イスラエルが渡って来れる筈がない。』

と高を括って、麦刈りに精を出していたということでした。

しかし、大自然を創造された神様には、何の不都合もなく、3章14節から、  
「ヨルダン川を渡るため、民が天幕を後にしたとき、契約の箱を担いだ祭司たちは、民の先頭に立ち、ヨルダン川に達した。春の刈り入れの時期で、ヨルダン川の水は堤を越えんばかりに満ちていたが、箱を担ぐ祭司たちの足が水際に浸ると、川上から流れてくる水は、はるか遠くのツアレタンの隣町アダムで壁のように立った。」

とあります。神様は、ご自身に信頼する、イスラエルを導いて、創造主として、自然をも、支配しておられる事を、偶像の神しか知らないエリコの人々にお示しになりました。

彼らの驚きと、憔悴仕切った様子が想像できます。そこで彼らは、6章1節に、記されていますように、

「エリコはイスラエルの人々の攻撃に備えて城門を堅く閉ざしたので、だれも出入りすることは出来なかった。」

とあります。エリコは一変して防御態勢にはいりました。エリコは頑強な城壁で囲んだ要塞都市でした。城門が破られない限り、どんなに戦力を備えた敵も、恐れることはありません。エリコの人達は、自分達の神々に助けを祈ったでしょう。一方、イスラエルは、その堅固な城壁に圧倒されたに違いありません。

しかし、2節を見ますと、

「そのとき、主はヨシュアに言われた。

『見よ、わたしはエリコとその王と勇士たちをあなたの手に渡す。あなたたち兵士は皆、町の周りを回りなさい。町を一周し、それを6日間続けなさい。7人の祭司は、それぞれに雄羊の角笛を携えて神の箱を先導しなさい。7日目には、町を7周し、祭司たちは角笛を吹き鳴らしなさい。彼らは雄羊の角笛を長く吹き鳴らし、その音があなたたちの耳に達したら、民は皆、関(とき)の声をあ

げなさい。町の城壁は崩れ落ちるから、民は、それぞれ、その場所から突入しなさい。』

と、神様はヨシュアに命じられました。

神様はイスラエル人に対しても、エリコの人に対しても、ご自身こそヤハウエ

「あるものをあらしめる、創造主なる神である」ことを示そうとしておられました。ですから、それは、神様の臨在を表すための隊列でした。ヨシュアは先ず、祭司たちを呼び集めました。この時イスラエルにとって、何よりも大事なものは、神様の臨在を表す、契約の箱です。祭司たちがこの契約の箱を担ぎます。隊列の順序は、13節によると、大体、次の様に思われます。先頭は武装兵です。彼らはヨルダン川の東側に、既に土地を得て、家族をそこに残して、ヨルダン川の西岸の土地取得を助けるために、武装してついて来たルベン族、ガド族、マナセの半部族の男子で、彼らがその任に当たったであろうとされて居ます。その後、7人の祭司が、雄羊の角笛を携え、それを吹き鳴らしながら進みます。その後、契約の箱、主の箱を担いだ祭司たちが進みます。

次に、13節には、

「武装兵が後衛として、主の箱に従った。」

とありますが、岩波訳では、

「後衛は殿(しんがり)、つまり、最後尾」

と訳されていますので、その間に戦いに出る事の出来る男子が続き、最後尾に、武装兵がいたと思われれます。女性や子供は、宿営にいたとされます。

イスラエルは、以上の隊列を組んで、エリコの町の城壁の周りを行進し始めました。

10節を見ますと、

「ヨシュアはその他の民に対しては、

『わたしが関(とき)の声をあげよと命じる日までは、叫んではならない。声を聞かれないように

せよ。口から言葉を発してはならない。  
あなたたちは、その後で関の声をあげるの  
だ。』と命じた。」とあります。

全員ヨシュアの命令を堅く守りました。

エリコの城内では、ラッパの音が鳴り響くだけで、城門が破られる様子も無く、これまで経験したことのない状況に、何事が起こるのだろうか、不安であったに違いありません。ヨシュアは隊列に、エリコの城外を一周させると、宿営に戻せました。2日目、ヨシュアは早朝、イスラエルを招集し、前日と同じように隊列を整えさせ、エリコの城壁の周りを、角笛を鳴り響かせながら、隊列には沈黙を命じ、一周させて、宿営に帰せました。ヨシュアは3日目も、4日目も、イスラエルに同じことを命じました。

民の間からヨシュアの命令に不平や不満が出ないことは驚きです。人間は、自分が納得した事には、不平を言わず、従いますが、何の理由か分からないで唯、

「従いなさい。」

と言われる事には、不平不満が出て来るものです。しかし、イスラエルは、ここで一言も呟いていません。彼らは、厳しい荒れ野の生活で、神様の言葉に従う事だけが、生かされる道であると言う事を体得したようです。彼らは神様の御力によって、ヨルダン川を渡ってくる事が出来た感動に、神様に聴き従った時に、与えられる祝福の大きさを経験して、エリコの町に対しても、神様は必ず与えて下さるとの確信と期待で、唯々、神様の命令に従うことに喜びを感じていました。

彼らは同じことを6日間繰り返しました。そして、15節を見ますと、

「7日目は朝早く、夜明けとともに起き、  
同じようにして町を7度回った。町を  
7度回ったのはこの日だけであった。」

とあります。7と言う数字は、聖書に於いて聖な

る完全数です。欠けたところがない。満たされているという事を意味します。天地創造の完結は、7日でした。ここでの7日間、7回は、神様の御計画のための時が満ちた事を示しています。ヨシュアは先ず、角笛を吹き鳴らさせて、これから成すべき事を命じました。

16節に、

「関の声を挙げよ。主はあなたたちにこの町を与えられた。町とそこにあるものは、ことごとく滅ぼし尽くして、主にささげよ。ただし、遊女ラハブおよび彼女と一緒に家の中にいる者は皆、生かしておきなさい。我々が遣わした使いをかくまってくれたからである。あなたがたはただ滅ぼし尽くすべきものを、欲しがらないように気をつけ、滅ぼし尽くすべきものの一部でもかすめ取ってイスラエルの宿営全体を滅ぼすような不幸を招かないようにせよ。金、銀、銅器、鉄器はすべて主にささげる聖なるものであるから、主の宝物倉に納めよ。」

と、ヨシュアの命令が下されますと、20節に、

「角笛が鳴り渡ると、民は関の声をあげた。」  
「民が角笛の音を聞いて、一斉に関の声をあげると、城壁が崩れ落ち、民はそれぞれ、その場から町に突入し、この町を占領した。彼らは、男も女も、若者も老人も、また牛、羊、ろばに至るまで町にあるものはことごとく剣にかけて滅ぼし尽くした。」

とあります。

エリコの陥落は、創造主なる神様の御計画で、ご自身の力を現されたものでした。それは、ヤハウエの神様が、どの様なお方であるかを現すものでした。神様の全能を信じる信仰が、ここには求められています。ここで私達が気になる事は、

「男も女も若者も老人も、  
ことごとく剣に懸けて主に捧げた。」

という事柄です。神様が何故そんな事を命じら

れたのか。今日の私たちには、理解に苦しむ所です。そこで考えたいことは、神様は歴史を導いておられるのですが、有史以来、人間社会の営みの中で、人間の理解力に合わせて、幼子を育てるように、分からせ、導いて来られたということです。

ヨシュアの時代、各民族には守護神がいて、戦いは、神と神との戦いであり、戦いは一つの宗教的行為でありました。そのために

### 『聖戦』

と呼ばれました。戦いに敗れた側の守護神は、自国民を守れなかったのですから、神としての資格は取り去られてしまいます。神無き状態に陥った住民と財産は、戦勝国の神に献げられたので、具体的には戦勝国の支配を受けることになります。ただ、その時、王や支配者は殺されたけれども、住民は無差別に殺されたのではないそうです。では、何故、エリコの住民は、

### 『全て剣にかけるように』

と命じられたのでしょうか。一説によりますと、エリコは約束の地、カナンの中核であったことから、中核はすべて、神様に捧げられるべきものでした。また、彼らは偶像に仕えていた民でしたから、彼らが生き残る事には、イスラエルの民が偶像に誘われる危険があったので、徹底的に滅ぼされたとの説があります。いずれにしてもそれは、紀元前1250年頃のカナン地方の人々の生き方の中で、ヤハウェの神様とは、どんな神様なのかを証しているのです。

その時代から三千年以上経った今日、神様は人間の歩みに合わせて、人々の考えを少しずつこしずつ、ご自身の御心に導いて来られました。

### 『旧約聖書は全て、イエス・キリストの

### 光を当てて理解しなければならない』

と言われます。その事をしないと、神様の御心を誤り、躓いてしまいます。神様の御心は、決して人間同士が争い合い、殺し合うことではあり

ません。人間が神様に背いて、私利私欲に走り、争い合う世界を生み出したのです。神様はその罪の連鎖を絶つために、神の御子イエス・キリストをこの世にお与えになったのです。神様は天地万物の創造主であられるばかりでなく、私達人間を御子の命に代えてまで、愛して下さいているお方です。

神様の御心は、全ての民が、ご自身に立ち帰り、神様を信じ、御子イエス・キリストを信じて、命の道を歩むことです。神様が如何なるお方であるのか、私達は更に、霊の目が開かれ、神様の偉大さ、愛の大きさを悟って、誉め讃える者とならせて戴きましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は、何時の時代も人間を、ご自身に立ち帰らせ、祝福しようと、人類の歴史を導いて下さっていることを感謝致します。

神様の人類に対する愛は、御子イエス・キリストを通して現されました。

創造主である、あなた様の偉大な御業を讃えると共に、イエス・キリストを通して現された、ご自身の愛の御心を真に悟る者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。